

PROJECT REPORT

松崎町魅力化プロジェクト 2025 実施報告書



2025.9.15 Mon~18 Thu
静岡県松崎町

CONTENTS

松崎町長メッセージ	1
松崎町役場からのメッセージ	3
主催者からのメッセージ	5
PHOTO REPORT	6
I. 松崎町魅力化プロジェクトの概要	8
(2025年9月15日～18日)	
II. 学生からの提案	10
1. 棚田観光資源化計画 (A チーム)	10
2. ぬい旅～ぬい活×旅行の融合観光プラン (B チーム)	13
3. まち留学 in 松崎町 (C チーム)	16
III. プロジェクトを振り返って	19
1. 学生たちの感想	19
2. 町の皆さまからの感想	26
3. 地域金融機関からの感想	28
4. コーディネーターから	30
IV. 松崎町魅力化プロジェクト 2025 成果報告会	32
(2026年1月15日)	

表紙の写真提供：松崎町

(石部の棚田、雲見からの富士山、なまこ壁の町並み)

松崎町長メッセージ

松崎町長

深澤 準弥



～プロジェクトを振り返って

初日の開会式と交流会、最終日のプレゼン大会と交流会に参加しました。最近の学生の皆さんは、VUCA時代に生きているからか、社会に対して課題感を持っていると感じました。自分の出身地に対する思いや仲間との信頼関係など、最近の若い人への評価（タイムパフォーマンス重視、自己中心的な価値観、社会に対する冷めた感情など）とは、全く違う印象を受けました。積極的に地元の人と会話し、交流を図る姿を見て、日本の未来に希望が持てました。地方の衰退（増田リポートによる消滅可能性都市）が叫ばれて10年以上が経ち、東京一極集中や地方の少子高齢化による人口減少には歯止めが掛かりませんが、このようなプロジェクトによって、若い人たちが地方に目を向けて、積極的に関わっていただけることは大変ありがたいことです。引き続き、何度も訪れていただき、第二、第三のふるさととして松崎町を位置づけていただけることを切に願います。

～参加学生からのプレゼン内容について

A チーム：石部の棚田でのピクニック企画

松崎町には、日本の原風景である石部の棚田が地元の方々の力により復田されており、保存のためオーナー制度などを実施しています。その棚田（景観）を体験コンテンツ化して、季節ごとに人を呼び込もうという企画でした。ピクニックや映える写真撮影、収穫体験などを充実し、地域おこし協力隊や地元事業者、耕作者との連携を図るというもので、担い手が不足していく中で、棚田の体験をより楽しいもの（ピクニック等）にするという、若者目線を取り入れてあり、興味深かったです（後日、収穫祭に2名の学生が来町し、飾り付けや物販を手伝ってくれました）。

B チーム：「ぬい活」と旅を融合した「ぬい旅」（ぬいぐるみ／ぬい活向けのツーリズム）

初めて聞いた言葉「ぬい活」、ぬいぐるみを持って出かける行動のことだそうです。若い人の中で「押し」というのは聞いたことがありますが、これは知りませんでした。若年層へのアプローチには、その世代のことをもっと学ばなければいけないと痛感しました。

C チーム：都市部の小中学生向けの体験学習／交流プログラム「まち留学」

教育旅行を活性化するため、その受け皿のバージョンアップ、将来的な関係人口の増加を見据えた提案でした。今までの体験旅行を深掘りし、より一層松崎の自然・産業・文化・暮らしを短期滞在で満喫できるプログラムの模索、地元の人との交流をもっと深いものにし、関係性を重視した実

実践的な学びをとのことでした。松崎町が目指す体験旅行は、まさにこれだということを確認させてくれるプレゼンでした。

～次回の実施・開催に向けて

今回、2度目のフィールドワークの受け入れでしたが、より実践的な提案が多く、松崎町の地元の方にも希望と期待を大きくさせていただいた気がします。人口減少が叫ばれている昨今、関係人口が重要なピースとなります。ふるさと住民登録制度も控えている中で、このような機会を我が町にいただけることはありがたいことです。次回以降も是非、松崎町へお越しいただければ幸いです。

また、提案の継続的な実装や、より広いエリア（松崎町だけでなく西伊豆町や南伊豆町を含めた）においての魅力化を図れるようにすることも必要ではないかと感じています。

引き続き、このプロジェクトを応援していきたいです。

静岡県松崎町について

総人口：6,038人（高齢化率48.8%） ※R2国勢調査

面積：85.11km²

位置：伊豆半島西海岸の南部に位置し、北・東・南の三方を天城山系に囲まれ、西は駿河湾に面している

地域資源：桜葉の塩漬、川のり、鮎、なまこ壁、岩科学校、石部の棚田、雲見海岸等



松崎町役場からのメッセージ

松崎町 企画観光課 参事

堀内 一成



今年4月に松崎町役場に着任した私にとって、COLLEGA（コッレーガ）の皆さんは初めてお迎えした学生フィールドワークのプロジェクトでした。当日を迎えるにあたり、事前に課内で打合せを行い、学生の皆さんにとって、そして町にとっても意義のある win-win なプロジェクトにしていこう、と話をしていました。

初日の開会式。円になって自己紹介をする学生の皆さんは、まだどこかよそよそしい感じで借りてきた猫状態。聞けばみんながリアルで会うのはほぼ初めてだったとか。インターカレッジの醍醐味ですね。これからの四日間でどんな化学変化をしていくのかとても楽しみでもありました。初日は春コースをアテンドしましたが、旧依田邸の建築、より道売店の土産物、山の家温泉など皆それぞれに興味関心のベクトルが異なっているようで、見ていてとても興味深かったです。二日目の松崎中学校の生徒とのワークショップでは、さすが先輩という風格で中学生をリードしていました。シャイな男子中学生から意見を引き出していた姿は印象的でした。

三日目のプレプレゼンでは各チームの素案を聞かせていただきました。わたしは民間企業（広告会社）から出向していることもあって、「オリジナリティ」「リアリティ」「ユニークネス」などを大切にしています。プレプレゼンを拝見し、少しでもそういった要素を付加し、企画がよりシャープになるよう意見もさせていただきました。

最終日に3チームそれぞれのプレゼンを受け、それらが高いレベルで、とても魅力的なプランに昇華していることに感心しました。学生ならではの視点、決して他人事ではなく自分事としての愛情あふれる視点、松崎町に根付いている本質的な価値を掘り起こし、それを活かした計画。3案ともに独自性と可能性を感じるプランになっていたと思います。また、チームとしてのまとまりも見られ、順応力の高さに目を見張りました。

プレゼン終了後、立食でのランチセッションで少し話はできましたが、各案をベースに議論する時間をもう少し取れると良いな、と感じました。

結びとなりますが、全体を通してとても充実した四日間で、町としては当初から望んでいた win-win な結果になることができたと感じています。参加いただいた学生の皆さん、そして素晴らしいプロジェクトに導いていただいた運営の皆さまありがとうございました。

今回の「わがまち魅力化プロジェクト」に参加いただいた皆さんと今後も関係を継続し、松崎町で見て聞いて感じた魅力をどんどん発信していただきたいと願っています。

齋藤 一憲

今回のプロジェクトでは、都市部の大学生が事前学習を経て実際に松崎町を訪れ、短期間のフィールドワークを通じて、地域課題の発見から事業計画の立案まで取り組んでいただきました。参加学生の皆さんの真摯な姿勢と柔軟な発想力に、町職員として大変感銘を受けました。

特に印象的だったのは、学生たちが松崎町の資源を「課題」ではなく「可能性」として捉えてくれたことです。人口減少や高齢化といった地域が抱える構造的な問題を、アクセスの不便さや小規模コミュニティといった特性を逆手に取った魅力として再定義し、それを事業アイデアに昇華させる視点は、私たち地域に暮らす者には見えにくい部分でした。最終日に発表された3つの事業計画は、いずれも松崎町の実情を踏まえた実現可能性の高い提案でした。

「石部棚田アウトドアレンタル事業」は、既存の観光資源である棚田の滞在時間延長という明確な課題に対し、低投資で実現可能な具体策を示してくれました。観光協会との連携や飲食店への経済波及効果まで考慮された設計は、町全体の活性化につながる視点として高く評価できます。「ぬい旅プラン」は、推し活という現代の消費トレンドと地域観光を結びつけた斬新な企画でした。SNS世代の行動特性を的確に捉え、地元企業との連携により地域内経済循環を生み出す仕組みは、新たな観光客層の開拓可能性を感じさせるものでした。「まち留学」は、子どもの教育と高齢者の社会参加という二つの課題を同時に解決する、社会的意義の高い提案でした。特に世代間交流を通じた関係人口創出という視点は、持続可能な地域づくりの本質を突いた内容だったと考えます。

3つの提案に共通していたのは、松崎町の「小ささ」「不便さ」を弱みではなく強みとして活用する発想でした。この視点の転換こそが、今後の地域活性化に必要な考え方だと気づかされました。

今回のプロジェクトを通じて、外部の視点が地域に新たな価値を見出す重要性を改めて認識しました。嬉しいことに、プロジェクト終了後も学生たちが松崎町との関わりを継続してくれており、実際に棚田の収穫祭で活動する姿も見られました。提案で終わらず、実際に行動に移してくれる姿勢に、松崎町への深い愛着を感じています。このような継続的な関わりこそが、真の関係人口創出であり、地域の未来を支える力になると確信しています。

最後に、このような機会をいただいたことに心から感謝するとともに、プロジェクトで生まれた学生たちと松崎町との繋がりが、継続的に様々な形で続いていける仕組みがあったら良いと感じました。若い世代と地域が互いに学び合い、共に成長していける関係性を大切にしながら、松崎町の新たな魅力づくりに取り組んでまいります。



散策時に解説をする
齋藤係長
(写真一番右)

主催者からのメッセージ

一般社団法人 COLLEGA

中山 彰都



「わがまち魅力化プロジェクト」は、地域の様々な関係者を巻きこみ、地域を考えるきっかけとなることを目的に実施しています。

昨年度のプロジェクトの課題として掲げていた「学生の提案を地域で実行していくための仕組みづくり」に対して、今年は地域事業者や関係者が学生の提案に対して主体的に関わるきっかけとして「札上げ制度」を導入し、プレゼン後には札上げを行った地域事業者・住民・金融機関・自治体・学生が一堂に会する交流会を設けました。提案する側とされる側という一方通行の関係ではなく、学生の提案を中心に多様な立場の人々が意見を交わす「対話の場」を設計したことで、次の一步につながる具体的なきっかけがいくつも生まれました。

また、学生の事前研修プログラムについても、さらなる充実を図りました。今年は全4回構成で実施し、プロジェクトの目的理解と学生自身が参加する目的と姿勢を言語化するところから始まり、地域ビジネスのリアルを学ぶ回では実践者の高橋竜太氏（tetta 株式会社 代表取締役）をゲストに迎え、実際の事例から学生は学びや気づきを得ました。そして事業計画の策定や資金調達の基礎では、小野瑞貴氏（ルクール株式会社 代表取締役）を講師に迎え、実務に直結する内容を段階的に積み上げました。単なるアイデアに留まらず、議論に耐えうるレベルの提案へと引き上げることで、審査員からのフィードバックもより具体的・実践的なものとなり、学生にとっても大きな学びの機会となりました。

さらに今年は、松崎中学校の生徒と大学生の交流プログラムを拡充し、地域内外の若者が共に地域の魅力を再発見する場を設けました。世代や立場を超えた対話を通じて、地域の未来を担う若者たちが自分ごととして地域を考えるきっかけが生まれたことは、大きな成果であったと感じています。

私は、地域を「外から考える」だけでなく、「中から動かす」ことも大切だと考えています。そのためには、地域に関わる様々な人が、立場をこえてフラットに意見を交わし、実行に向けて一歩ずつ進めていく場が欠かせません。今年の「わがまち魅力化プロジェクト」を通して、その土台がしっかりと築かれてきたように思います。ここからは、関わった人たちが自分の思いを持ち寄りながら動き出していく、そんな循環が生まれていくことを願っています。学生の学びや気づきが次の行動につながり、地域の人々の思いが新しい挑戦を生む。そうした繋がりや輪が、少しずつ広がっていくことがこのプロジェクトの一番の価値だと感じています。

最後に、本プロジェクトにご協力いただいた松崎町の皆さま、学生、企業、金融機関、行政関係者の皆さまに、心より御礼申し上げます。皆さまの力があってこそ、このプロジェクトは毎年進化を続けることができます。今後も、人と人、世代と世代、地域と外部の力が結びつき、松崎町から新たな価値が生まれていくことを願っております。

PHOTO REPORT 2025.9.15~9.18

DAY1 9.15



DAY2 9.16



DAY3 9.17 ~DAY4 9.18





ABOUT THE PROJECT

I. 松崎町魅力化プロジェクトの概要

1. プロジェクトの目的

都市部の大学生が少子高齢化や過疎化の問題を抱える地方のまちに滞在し、地域資源を生かしたビジネスの可能性（魅力化アイデア）を探る体験型プログラムである。3泊4日のフィールドワークを通じて、地域が抱える課題を大学生がリアルに体験することで、机上では得られない経験と実践的な学びを提供するとともに、地域の様々な関係者を巻き込み、地域を考える一つのきっかけとなることを目指している。

2. 日程

2025年（令和7年）9月15日（月）～18日（木） 3泊4日

3. 参加学生

全国5つの大学から集まった大学生12名が参加

大学	学部	人数（学年・性別）
慶應義塾大学	理工学部	1名(3年女子)
成蹊大学	経営学部	1名(2年女子)
都留文科大学	教養学部	2名(2年女子)
名古屋市立大学	人文社会学部	1名(2年女子)
	経済学部	1名(3年女子)
横浜市立大学	国際教養学部	1名(2年女子)、5名(3年女子)

4. テーマ “松崎町の観光資源を活かした事業提案”

松崎町の観光資源および町の現状を理解し、具体的な課題の特定・分析を行い、当該課題解決と地域経済の活性化に繋がる“実現可能”で“持続的な”事業を提案する。

※「観光客を誘致する」ことに限らず、広く地域経済を活性化する解決策を求める。

5. 実施体制

主催：一般社団法人 COLLEGA（コッレーガ）

共催：一般財団法人日本総合研究所、一般財団法人社会開発研究センター

後援：松崎町

協力：松崎町町民・事業者の皆さま、横浜市立大学、都留文科大学

わがまち魅力化プロジェクト 2025 プログラム

日付	時間	内容	詳細	場所等	
15日 (月)	13:15	14:00	開会式	松崎町役場（環）研修室	
	14:00	16:40	FW	春・夏コース散策	
	16:40	17:00	移動	移動（宿舎）	
	17:00	18:00	作業	グループワーク	旧山田邸
	18:00	18:30	MTG	グループMTG	旧山田邸
	18:30	20:30	食事	夕食	異空間
16日 (火)	8:00	9:00	食事	朝食	コスタフォルノ（宅配）
	10:00	10:30	移動	移動（松崎中学校）	
	10:30	12:20	FW	地元中学生交流	松崎中学校
	12:20	12:30	移動	移動	
	12:30	13:30	食事	昼食	あうん
	13:30	14:30	FW	町役場・観光協会インタビュー	松崎町役場（環）研修室
	14:30	17:00	FW	自由調査・グループワーク	
	18:00	18:30	MTG	グループMTG	旧山田邸
17日 (水)	18:30		食事	夕食	であい村蔵ら（宅配）
	8:00	9:00	食事	朝食	であい村蔵ら（宅配）
	9:00	11:00	作業	グループワーク	旧山田邸
	11:00	12:00	発表	プレ・プレゼン	旧山田邸
	12:00	13:00	食事	昼食	
	13:00	18:00	作業	グループワーク	旧山田邸
	18:00	18:30	MTG	グループMTG	旧山田邸
18日 (木)	18:30		食事	夕食	であい村蔵ら（宅配）
	8:00	9:00	食事	朝食	清水屋
	9:00	9:45	移動	宿舎清掃～移動	旧山田邸
	10:00	12:00	発表	プレゼン大会	松崎町役場（環）研修室
	12:00	14:00	食事	昼食交流会	松崎町役場（環）研修室
	15:00		移動	解散、バスにて松崎町出発	

日付	時間	所用時間	春コース	
15日 (月)	14:00	14:05	0:05	移動
	14:05	14:20	0:15	那賀川浴い桜並木
	14:25	14:40	0:15	道の駅 花の三聖苑伊豆松崎
	14:40	14:55	0:15	依田之庄 / 野天風呂 山の家
	14:55	15:10	0:15	移動
	15:10	15:50	0:40	伊豆の長八美術館
	15:50	16:10	0:20	移動
	16:10	16:40	0:30	観光協会前、まち歩き
	16:40	17:00	0:20	移動（旧山田邸）

日付	時間	所用時間	夏コース	
15日 (月)	14:00	14:10	0:10	移動
	14:10	14:20	0:20	室岩洞
	14:25	14:45	0:20	雲見海水浴場、温泉街
	14:45	15:15	0:30	移動
	15:15	15:45	0:30	棚田
	15:45	16:10	0:25	移動
	16:10	16:40	0:30	観光協会前、まち歩き
	16:40	17:00	0:20	移動（旧山田邸）

PRESENTATION

Ⅱ. 学生からの提案

Ⅰ. 棚田観光資源化計画

A チーム

堀川 ほのか

亀田 紗良

石黒 七海

松田 彩花



松崎町の石部の棚田をリピーターも新規観光客も、唯一無二の体験を提供できる場所にするを目的として、私たちはこの企画を考えました。

石部の棚田の魅力については、まず最大の特徴が歩きやすく整備された畦道です。ぬかるみのないコンクリートで整備されているため、高齢者や子ども連れでも安心して散策ができます。また、田んぼや山、海を一望できる景観と、周辺が開発されていないことによる、昔ながらの棚田風景も大きな魅力だと考えています。他地域の棚田と比べても、静かで写真映えする点が強みだと考えています。

次に現状分析です。松崎の既存観光客層は、春や秋は自然を楽しむ高齢のご夫婦が多いのに対して、夏は海水浴目的のファミリー層が中心です。私たちは、春秋の既存観光客に注目して研究を進めました。

しかし、一部の棚田には、滞在時間が短かったり、定番の観光地ではなかったり、他の観光地と距離があったり、座る場所がないなどの課題もあり、見るだけで終わってしまうという点が問題だと考えました。

そこで、私たちが提案するのが棚田ピクニックです。棚田を「見る」場所から、ゆっくり「過ごす」体験型観光を目指しました。この取組は、

若年層と既存観光客の両方のニーズを満たせる点が特徴だと思っています。

まず、既存の観光客に対しては、連泊中のお昼は街で食べるという、これまでの行動に対し、田舎で過ごすピクニックという、新しいお昼の体験を提案することができます。次に、若年層に対しては、SNSで投稿したくなる体験を提供できると考えています。現在、SNSでは「#picnic」や「#自然界隈」、「#夏の思い出」などが急上昇しており、棚田は自分だけ唯一無二という価値を持っているため、SNSで投稿して若年層を新たな顧客のニーズとして獲得することができると考えています。こうした棚田ピクニックによって、既存・新規どちらのニーズも満たせます。

次に事業内容についてですが、1つ目は椅子、テーブル、ワゴンなどのアウトドア用品の貸し出しです。2つ目はハンモックです。ハンモックを設置するための支柱は常設して、布は地元の方が作ったものを使用することで地域性と温かみを演出します。料金は1セット3,500円で、翌日の返却の場合は追加料金とします。運営は観光協会を窓口とし、受付や返却、管理点検を一括で行います。また、「利用時しおり」に周辺の飲食店の紹介を掲載することで、地域との連携も強化しています。そして、棚田マップの作成も考えています。ピクニックに最適な場所の案内や景観の紹介などを行っています。3つ目の事業は募金です。返却時に募金を施すことで、観光と棚田保全を両立させています。

将来の展望としては、名産品や体験型商品の自動販売機を設置したり、誰でも利用できる動く歩道を設置するなどをして、松崎町＝棚田という名所を定着させて、定番観光地化を目標としています。



石部の棚田の課題

滞在時間が短い

他観光地と距離がある

定番の観光地ではない

座る場所がない

01. 歩きやすい畦道 Walkable

ぬかるみのない滑らかなコンクリート

#自然界隈

Tik Tok—5.2万件
Instagram—7.2万件

#夏の思い出

Tik Tok—13.5万件
Instagram—227万件

#picnic

Tik Tok—140万件
Instagram—1183万件

02. 行き届いた整備

既存の顧客層のニーズ

連泊中のお屋は町で食べる
↓
新しいお屋の体験の提案

棚田のファン
棚田トラスト会員
棚田カードの収集者 20-30人/年

03. 田, 山, 海を一望できる

04. 昔ながらの棚田の景色 周辺が開発されていない

埼玉「寺坂棚田」→
周辺に民家や工場

<https://www.yokoze.org/2025/09/49500/>

1. アウトドア用品

10000円ほどのリラックスできるような椅子

折りたたみ式のコンパクトなテーブル

https://item.rakuten.co.jp/diymania/cd16602/foodie_01_ahhnesso_item_share

<https://amzn.asia/d/5Dunr4Y>

松崎町の既存観光客層

	春・秋	夏
過ごし方	自然を楽しむ	海水浴
客層	リピーター 高齢のご夫婦	ファミリー
訪れる場所	棚田、海(入水せず)、地元のお店	海水浴場

2. ハンモック

支柱は棚田に常時設置

布は地元の方が作ったものを使用
後に説明



料金

基本料金：
1セット（2or3脚、1テーブル、1-3ハンモック、ワゴン）
3500円

追加料金：
翌日返却の場合
翌日10時まで→+1000円/10時以降→+3,500円



蔵ら

ハンモックの布の作成を依頼
地域性＝唯一無二のもの



←Googleマップより引用



必要な初期資金

24万円

<内訳>		金額（万円）
運転資金	SNS	10
	チラシ	1
設備資金	・テーブル×2、椅子×6	8
	・ハンモック支柱×3	1
	・運搬用ワゴン×2	4



観光協会

アウトドア用品・ハンモック布の貸し出しや保管の運営を依頼
募金箱の設置



利用の流れ

観光協会が窓口 受付・返却・管理点検を担う
予約は主に来訪・電話

まとめ

『松崎町＝棚田』

のイメージ付けをする

棚田マップの作成

おすすめピクニック場所orハンモック設置場所



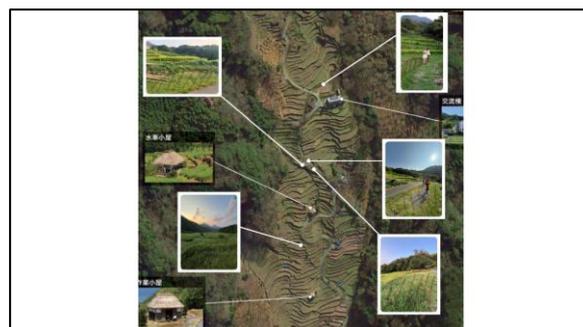
「自動販売機」

売上UP

- ・地域の名産品
- 事業者との連携、場所貸し
- ニーズ：道の駅と離れている
- ・シャボン玉
- ・ヤギの餌



←参考：
棚田展望台に近くの自動販売機




観光客層の大幅な拡大 →観光地の定番化

「動く歩道」

誰でも！夏でも！冬でも！

参考：
横手山スカイレーター
利用者数は不明
<https://asatan.com/articles/6050>

2. ぬい旅

「ぬい活×旅行」の融合観光プラン

B チーム

岡谷 ひめの

佐藤 翠花

吉川 凜乃

早川 可奈子



「ぬい活」とは、推しのぬいぐるみと一緒にカフェに行ったり、旅行に行ったりして写真を撮ることで、「Z世代の『ぬい活』」に関する実態調査によると、Z世代の8割以上がぬい活の経験があるという結果で、非常に人気のコンテンツです。また、「推し活に関する調査」によると、3人に1人が推し活をしているというデータがあり、現在の推し活市場は約3兆5,000億円と、非常に伸びている市場です。これは日本のゲーム市場よりも大きいので、今後さらに発展していくのではないかと考えられます。

ここからは、ぬい活と旅行の融合観光プランの内容について見ていきます。まず、なぜぬい活を松崎町で行うのか。都会でぬい活・推し活をすると人混みになることが多く、それをストレスに感じたり、それでも映える場所で撮りたい人が、ほかの人が映り込んでいて良い写真が撮れないというマイナスの面が多くあります。そこで、松崎町の魅力や良いところを考え直してみると、静かで穏やかな街であること、人通りが少なく、人の目が気になりにくいこと、アートと自然歴史があふれているスポットが多くあり、ぬいと一緒に撮れる場所がある、ということが考えられます。このようにぬい活をする際に感じていたマイナスの面を、松崎町ではプラスでできるといったことが考えられます。つまり、ぬい活を松崎町で行うことは、とても相性が良くて最高であると考えました。

続いて、ぬい旅を3つの事業から紹介していきます。まず、ぬいとおとまりについてです。

ぬい専用の布団と浴衣をレンタルします。旅館やホテルのプランに、プラス料金でぬい活プランというものをつくります。旅館のプランとして提供することで、実際に松崎町に来て消費をしてもらうということが可能になります。

続いて、観光地連動ぬい服です。こちらは松崎町の観光地である室岩堂や雲見海水浴場、石部の棚田など、それぞれの観光地と連動したぬい服をつくることで、実際に松崎町に来てその観光地を訪れて写真を撮ることにつながります。棚田自体では商品をつくることはできませんが、こちらのぬい服をつくることで棚田に行ってもらい、ぬい服を購入してもらうことができるようになります。通年デザインと季節限定のぬい服をつくることで、1年を通して飽きさせずに何回も来ていただけたと考えました。

最後にフォトマップです。こちらは松崎町観光協会が作成したマップに、私たちがぬい旅マップとして手を加えたものになります。マップの中にピンを打ち、この場所で撮れる写真を貼ることで松崎町に来ていただいた方に、どのような場所で写真を撮りやすいか、おすすめスポットを見せるようになっています。

ぬい旅を実現するためには、このような事業サイクルが必要であると考えました。宣伝方法は主に公式 Instagram を活用することを想定しています。資金調達は、ぬいぐるみ作成のプロジェクトを達成したこともあるクラウドファンディングを利用しようと考えました。

目標は毎月10組を呼び込み、1組平均3着のぬい服をつくっていただくこととしています。

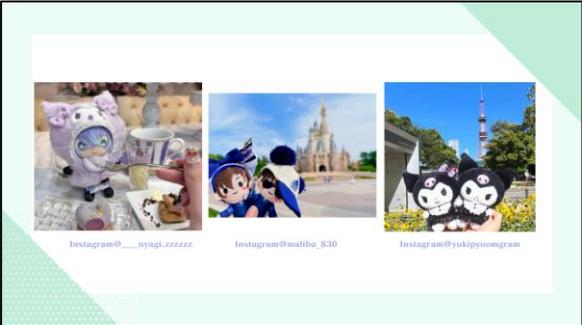
ぬい旅

ぬい活×旅行の融合観光プラン

静かで穏やかな町

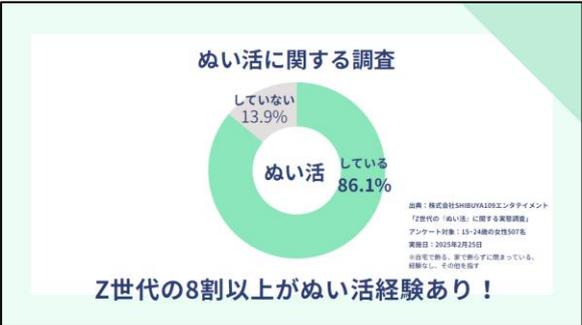
人通りが少なく、人の目が気になりにくい

アートと自然、歴史が溢れるスポットがたくさん



若い人が来てほしいね。
なんてゆうか…
活気が欲しい!!!

ヒラマツさん
縫製工場株式会社ヒラマツの
代表取締役



未だに夕日の景色に
感動している✦
松崎町の魅力を
知ってもらいたい！

高橋さん
育児中の女将さん



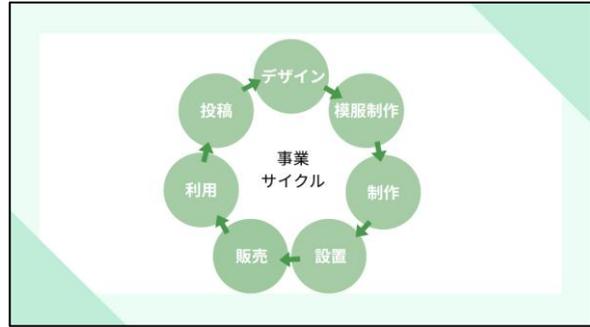
- ### ぬい旅
- ぬいとおとまり
 - 観光地連動ぬい服
 - フォトマップ

人混みがストレス

でも映える場所で撮りたい

人が写り込んでいい写真が撮れない





宣伝方法

公式Instagram開設
Instagram広告
松崎町関連アカウントと連携



《パンフレットのイメージ》

information

〒410-3696
静岡県筑波郡松崎町

01-2345-6789

@nuitabi_matsuzaki

ぬいと特別な
旅行体験を
松崎で

通年デザイン

- ・探検服
- ・なまこ壁柄ワンピース

季節限定

- ・桜模様
- ・海水浴場
- ・棚田
- ・桜葉



ぬい活
スポット

①山の家露天風呂

②旧依田邸

③道の駅 花の三聖苑

④花畑と桜並木

⑤なまこ壁通り

人混みがなく
自然・文化・建造物...
魅力あふれる松崎で
あなたとぬいの
思い出作り

3. まち留学 in 松崎町

C チーム

安島 芽生

杉田 遼奈

浅倉 麻尋

舟久保 夏寧



私たちは、松崎町で過ごして、大きく3つの魅力を感じました。つながり、伝統、そして原風景です。つながりに関しては、外から来た私たちを自然に受け入れる、ただ街を歩いているだけで多くの町民の方が話しかけてくれ、温かいコミュニティに出会いました。また、暮らしの中には、漆喰鏝絵やなまこ壁など、日本の伝統文化が当たり前のように溶け込んでいる街の風景を目にしました。伊豆の中では最も平野が広いということも教えていただきましたが、広い平野と里や海が揃う、私たちが昔ながらに思い描くようなふるさとのような原風景を目にしました。

一方で、複数の課題も見つけました。人口が減っていること、交通の便が悪くなかなか現地にたどり着けないこと、左官職人が減っているなどの課題もありますが、私たちはその課題を次のように捉え直しました。人口が減っていることに関しては、関係人口をもっと増やしていける要素があると思います。交通の便が悪いことに関しては、長く滞在できるプランを用意すれば解決できるなど、課題に対してこのような認識の捉え方をしました。

そのことから「まち留学」を提案しました。まち留学は、松崎町を拠点に1週間という、観光旅行よりは長い滞在型のプログラムになっています。対象は小中学生で、都会に住む小中学生に農業、漁業、伝統文化、生活スキルなどの習得をしてもらい、暮らすように旅をする経験を積んでもらうプログラムです。

このプログラムに松崎町の地域の高齢者の方も見回り役や先生として関わってもらいます。現状として、都会に住む子どもたちが自立する練習であったり、非日常を体験する場が少なく不足していることや、松崎町で増えている高齢の方の役割や生きがい不足しているということから、松崎町の豊かな自然や温かいコミュニティを舞台に、子どもや高齢者が世代を超えて交流できるような場を目指しています。また、松崎町の子どもたちにもプログラムに参加してもらおうと思っています。松崎町のことを知らない子どもたちが町外から来ることで、松崎町の魅力に気づいたり、町外の子どもと交流できるテーブルもつくろうと思っています。

具体的なスケジュールとしては、民泊を考えていて、1週間かけて松崎町の魅力を発見することを目的として、棚田で遊んだり、町歩きなどをします。そこで地元の小学生や地域の方にガイドをしてもらい、町の魅力を発見してもらったり、実際に町の方と一緒にお手伝いをしたり、海で遊んでもらいます。松崎町が持つ自然豊かな資源を活かしたプログラムになっています。

観光旅行とは違う長期滞在ということで、教育的活動や地域活性化を同時に実現できる点が特徴です。松崎町が独自に提供できる海と山に囲まれた豊かな自然や、アクセスが不便であるからこそ長期滞在をすることで、松崎町独自の体験を提供できます。また、枠組みに高齢者の参画を想定しているので、世代間の創出を図ることも特徴です。



03 ターゲット顧客

ターゲット顧客

① 都市部在住の小学5年生～中学3年生

② その保護者

都市部在住 自然に触れる機会がない 何かを見つけたい
自分の興味関心 自分らしさ これから学びたいもの

関係する人々

- 松崎町の小中学生
 - 住んでいても町について知らない
 - 他地域の子とも交流したい
- 松崎町に住む高齢者
 - 定年退職
 - 地域で生きがいを求める

→ 歴史や文化を伝える発信者に
→ 町外の子どもたちとともに楽しむ

→ 知識を活かして歴史・文化継承
→ 誰かのために活動する

01 松崎町の魅力：【偉人が待つまち松崎町】

開かれた人のつながり

外から来た人を自然に受け入れる、暖かいコミュニティ

暮らしに残る伝統文化

漆喰(しっくい)絵やなまこ壁など、伝統文化が生活の中に残る

伊豆では珍しい“原風景”

広い平野と里山、海がそろう、ふるさとのような景観

03 ニーズとインサイト

インサイト

① 都市部在住の小学5年生～中学3年生とその保護者

自立
自分で考えて行動できるように
なりたい/なつてほしい

体験・経験
都市部では経験できないことに
取り組みたい/取り組んでほしい

自分らしさを見つける
他の子がやっていないような
自分だけの特別な経験をしたい

非日常空間
新鮮でワクワクする体験をしたい
日常の生活から一度離れてみたい

01 松崎町の課題 → 目指す未来

- 人口が減っている → 関係人口の増加
- 交通の便が悪い → 長く滞在したくなるまち
- 左官職人が減っている → 伝統文化の継承
- 子どもとの関わりが少ない → 世代をつなぐ生きがい
- 外との関わりが少ない → 都心とも交流する地域社会

03 顧客のニーズとインサイト

インサイト

② 松崎町の小中学生

まちの魅力再発見
もっと松崎町について知って
自分のまちに誇りを持ちたい

自ら発信者になる
伝える力、発信力を身に付けたい
松崎町の良さを知ってもらいたい

③ 松崎町に住む高齢者

生きがい
自分の経験や知識を活かして
誰かに必要とされたい

子どもとの関わり
普段忙しくて関わる機会のない
子どもたちと接する機会が欲しい

02 「まち留学」とは

まち留学 in 松崎町

松崎町を拠点に、1週間の滞在型プログラムを小中学生に提供する「まち留学」。

小中学生は、農業・漁業・伝統文化・生活スキル習得を通して、「暮らすように旅をする」経験を積みます。

地域の高齢者は「見守り役」「先生」として関わり、自らの経験や知恵を子どもたちに伝えることで**役割と誇り**を得ます。

04 1日目 キックオフ！！

- ・プログラムで関わる地域の方・小学生と顔合わせ
- ・オリエンテーション
- ・興味に合わせてお手伝いする場所、調べる場所を決定
- ・ご飯会

02 「まち留学」とは **回覧版で運営メンバーを募集！**

04 2日目 棚田であそぼう！山のめぐみいただきます

・棚田での農業体験など
→ 松崎町の食材を使用したごはんづくり

04

3日目 まちのたんけん隊！松崎魅力発見

- ・まち歩き
→小学生や地域の方にガイドをしてもらう
ex) 桜、お花畑、なまこ壁、洞窟、漆喰鏝絵、重文岩科学校



05

必要な資金

収益モデル

- 参加費収入：7万円/人
- 収益例：15人参加の場合
 - ・総収入→105万円
 - ・必要経費→86万円
 - ・営業利益→約19万円



04

4日目 お仕事体験—まちのお手伝いをしよう—

- ・まちのお手伝い
お花畑の水やり、商店での店番、浜辺のゴミ拾い
- ・漆喰鏝絵の体験（長八美術館）



06

提供する価値

○小中学生

- ・自立心
- ・社会性
- ・実生活のスキル向上

○保護者

- ・子どもの成長と安心感

04

5日目 海のぼうけん！つり＆クルーズ



- ・船釣り体験（なごみ丸）
- ・お昼：釣った魚を食べる
- ・松崎ジオサイドクルーズ

06

提供する価値

○高齢者

- ・役割と生きがいの提供

○地域

- ・関係人口の増加と経済波及効果

04

6日目 まちの博士になろう！



- ・一週間で学んだことのまとめ作成
- ・プレゼントづくり
- ・地元の方とのBBQ

06

競合との差別化

- ①「生活に根差した長期滞在」を通じて、教育的価値と地域活性化を同時に実現する
- ②「海と山に囲まれた豊かな自然」「完結性」「アクセス面の不便さを逆手に取った長期滞在の必然性」という強みを活かした、松崎町独自の体験を提供
- ③高齢者の参画を仕組みに組み込むことで、世代間交流の創出を図る

04

7日目 みんなのお別れパーティー



- ・プレゼント交換会
まちの人：修了証・手作りみあげ
小中学生：まちの魅力をまとめたアルバム
- ・帰宅

さいごに：私たちの想い

【偉人が待つまち松崎町】

まち留学を通して

- ・松崎町が元気になる
- ・松崎町のファンが増える



Ⅲ. プロジェクトを振り返って

1. 学生たちの感想

A チーム

石黒 七海

横浜市立大学 国際教養学部 国際教養学科 3年

ビジネスプランであることとまちづくりという観点でどう松崎町に貢献できるか、その意味合いを整理するのがとても難しかったです。フィールドワークや事前研修、メンバーの中で話し合いを重ねるごとに整理されて、最終的にピクニックという形ができて良かったです。松崎町の4日間は毎日新鮮で、フィールドワークで町の方々とお話しして様々なアドバイスや情報をお聞きしたり、風景を見たりして、ピクニックの実現性がどんどん高くなっていくことにとってもワクワクしていました。それでもそのワクワク感をどう他の人に伝えるか、どう文章化するかが難しかったです。ですが、チームの中でお互いの得意不得意を組み合わせながらしていくことで納得のいく発表ができたかと思います。

このプロジェクトからまちづくりに対してもっと関わりたいと思うようになりました。それは、松崎町での皆さんのお人柄の良さや町の雰囲気の良さがあったることだと思っています。今後もこのピクニック事業実現に向けて松崎町との関わりを大切にしていきたいと思っています。4日間、本当にありがとうございました。

亀田 紗良

横浜市立大学 国際教養学部 国際教養学科 2年

今回のプロジェクトを通して、地域創生の難しさと奥深さを実感しました。私のグループでは「棚田の観光地化」をテーマに提案を行いました。その過程で観光地化の難しさを痛感しました。どんなに景観が美しくても、町の観光資源として活用するためには、観光客がその場所でお金を支払う仕組みが必要になるからです。初めて棚田を訪れた私にとって、雄大な自然の中で大きな機械を使わず丁寧に管理されている棚田の風景は、非常に魅力的でした。ただ、古くから棚田が町に根付いているからこそ、住民にとってはあくまでも農業の場であり、特別な観光資源とは感じにくいことも住民の方のお話を聞く中で実感しました。最終プレゼンをきっかけに、地域おこし協力隊として棚田に関わっている方からお声がけをいただき、10月4・5日の棚田の収穫祭にも参加させていただきました。数日ぶりに訪れた棚田は、やはり何度見ても素晴らしく、地域の方々と交流もすることができ、その魅力をさらに実感しました。今後も棚田の魅力を高める活動を続けていきたいです。そして、外から観光地として「消費」するのではなく、地元の人々にとっても愛着の持てる場所としての棚田を実現したいです。

堀川 ほのか

名古屋市立大学 人文社会学部 現代社会学科 2年

実現可能でありながら、まちに確かな変化をもたらせるビジネスプランにするために、スケール感や目的の整理に時間がかかりましたが、事前研修と現地での4日間を通して納得のいく形に仕上げられたと思います。プログラム内容は非常に濃く、どの瞬間にも学びがあり、地域の人や土地に触れながら自分の考えが具体化していく過程を実感できました。私たちがテーマとした棚田について、まず自分たち自身が心から楽しみ、魅力を実感することが需要の根拠になると気づき、机上の計画にとどまらず、実際に体験し感じ取る大切さを理解しました。発表準備は大変でしたが、最後まで楽しみながら形にできたことで、「まちづくり」に対する自分なりの理想的な関わり方が少し見えてきたと感じます。また、チームでは真剣な議論とともに訪れる場所や食事を共に楽しむ時間を大切にし、それが絆を深め、建設的な議論を生む基盤となりました。互いを尊重し、どんな意見にも前向きに耳を傾ける姿勢があったからこそ、より良い発表につながったと思います。提案したプランを実現に繋げたいという思いに加え、プロジェクトを通して松崎町の自然や人の温かさに惹かれたため、今後も松崎町に積極的に関わっていきたいと考えています。

松田 彩花

名古屋市立大学 経済学部 会計ファイナンス学科 3年

「実現可能性の高い」事業を考えることが難しかったです。私は大学で会計について学んでいることから、事業提案で収支計画を作成する際にその知識を活かすことができると考えていました。しかし、実際に事業内容を考えてみる段階になると、「資金はどこから調達するのか」や「人件費を抑えるためにはどうしたらいいか」など理論だけで考えていくには難しいことがたくさんありました。自分一人では行き詰まってしまいましたが、グループで話し合い、様々な意見を出し合うことで解決策を見つけていくことができました。改めてチームの大切さを学びました。

また、松崎町に住んでいる方との交流を通して地域としての魅力やあたたかさを実感しました。インタビュー等で多くの方とお話をさせていただきましたが、私たちの活動にとっても協力的な方が多かったことが印象に残っています。観光資源だけでなく、松崎町が大好きで松崎町の良さを発信して欲しいと思う方がたくさんいることも一つの魅力だと感じました。

このプロジェクトを通して、今までにない経験をたくさんすることができました。関わってくださった方々に感謝しています。ありがとうございました。



B チーム

岡谷 ひめの

横浜市立大学 国際教養学部 国際教養学科 3年

本プロジェクトを通して、様々な経験をさせていただきました。今まで大学の授業で、地域に合った定住促進案を提案する機会などはありませんでしたが、まちの人に直接お話を聞くことはありませんでした。まちに住んでいる方々、事業を行っている方々のお話を伺う機会が多く、実際の声を聞くことができました。松崎に深く関わりのある方たちは、やはり松崎町への思い入れや愛着が強いと感じました。その方たちの影響もあり、今回初めて松崎町を知った私もプロジェクトが終わるころには松崎町に深い親しみを感じるようになりました。また、グループワークの面白さ・大変さを痛感しました。このプロジェクトで初めて会うメンバーと話し合いやフィールドワークを行いました。初めは上手くいくか不安でしたが、現地調査で対面してからは、対面で進められるやりやすさ、楽しさを体感しました。しかし、一方で、異なる意見が出た際のまとめ方やスケジュール管理が非常に難しいと感じました。

プロジェクトを通じて、自分の課題点や強みにも気づくことができました。貴重な経験をさせていただき、運営のみなさまには感謝の気持ちでいっぱいです。一緒にフィールドワークや事業提案を頑張ってくれた参加者、チームのみんなもありがとうございました！

佐藤 翠花

都留文科大学 教養学部 地域社会学科 2年

このプロジェクトに参加して、まず何よりも良かったと感じたのは、松崎町の方々と直接知り合えたことです。住民の皆さんが、私たちの提案に真剣に耳を傾け、実現に向けて前向きに考えてくださる姿勢に、地域への熱意を感じました。まるで自分のことのように語ってくださるその姿に心を動かされ、地域活性化を学ぶ私にとって大きな励みとなりました。こうした方々がいることを知ることができたのは、今後地域と関わっていくうえでの自信にもつながりました。また、他大学の学生と協力して企画を練り上げる中で、異なる視点や考え方に触れることができ、自分の視野が広がったと感じています。それぞれの得意分野を活かしながら、夜遅くまで話し合いを重ねる中で、チームとしての一体感も生まれました。自分一人では思いつかなかったアイデアが形になっていく過程はとても刺激的で、提案づくりに対する姿勢もより前向きになりました。さらに、プレゼンの準備では、住民のみなさんにとって、身近でない「ぬい活」をどうプレゼンするのかに苦労しました。一生懸命に伝えたことで、松崎町の方々から前向きなフィードバックをいただけたのは大きな喜びでした。

地域の方々との出会い、他大学の仲間との協力を通して得た気づきや成長は、今後の学びや活動にしっかりと活かしていきたいです。ご協力いただいたみなさま、本当にありがとうございました！

早川 加奈子

横浜市立大学 国際教養学部 国際教養学科 3年

プロジェクトに参加する前は、松崎町について場所も名前も知らない状態でした。事前研修で松崎町について調べ、松崎町について想像をしながら事業提案を考えました。しかし、フィールドワークを行って、実際に松崎町を訪れてみないと分からない町の雰囲気や町に住む人の雰囲気、町の魅力を感じました。今回のプロジェクトを通して、フィールドワークをすることの大切さを改めて感じました。

事業提案を行ったことがなく、実現できるような事業内容や資金の調達方法について考えることに難しさを感じました。それと同時に事業を立ち上げた人の凄さを思い知りました。

他県から移住してきた方にお話を伺った際、「ずっと松崎町に住んでいる方は何もないと言うけれど、他地域から移住してきた自分からするとたくさんの魅力がある。」とおっしゃっていたのがとても印象に残りました。私自身、ずっと同じ地域に住んでいるため、自分が気づいていない地元の魅力があるのだろうなと思いました。よって、多くの地域を訪れて、訪れた地域だけでなく、新たな地元の魅力を発見したいと思いました。

同じグループで活動した3人や他のグループだった方、運営の方、松崎町役場の方、フィールドワークでお話を伺った方など、プロジェクトに関わってくださった皆様、ありがとうございました！また松崎町にお伺いしたいです！！

吉川 凜乃

成蹊大学 経営学部 総合経営学科 2年

このプロジェクトを通して、私が一番強く感じたのは「人との縁の力」です。松崎町で出会った人たちは、みんなが互いに支え合い、温かいつながりで町を守っていました。町役場の方々との交流では、地元の絆がこんなにも深く、美しいものだとなり、横浜で育った私にとって生まれて初めて“本物のつながり”を感じた瞬間でした。

また、このプロジェクトで初めて「地域創生」という分野に触れ、地域を支える仕組みや人の想いを学ぶことができました。小さな町だからこそ人の力が大きく、地域を動かすのは“人と人のつながり”なのだ実感しました。

チームのみんなと全力でプレゼンを作り上げた時間も、私にとって大切な宝物です。夜遅くまで意見を出し合い、朝早くから準備を重ね、想いを一つにして挑んだ日々は、仲間と本気で何かを創る喜びを教えてくださいました。

松崎町で生まれたたくさんの“縁”が、私に人との関わりの尊さと、地域に貢献することの意味を教えてくださいました。これからも、この経験を糧に“人をつなぐ力”で社会に貢献していきたいです。

このプロジェクトでの経験が、私を大きく成長させてくれました。プロジェクトを支えてくださった方々、おいしいご飯を作ってくくださった方々、町でインタビューに協力してくくださった方々など、関わってくださった全ての人に心から感謝しています。ありがとうございました。

C チーム

浅倉 麻尋

横浜市立大学 国際教養学部 国際教養学科 3年

このプロジェクトを通して、松崎のたくさんの方の魅力に気づくことができ、松崎の魅力をより多くの人に伝えたいという気持ちが強くなりました。私は静岡県伊豆半島出身のため、小さいころから、松崎という地名を耳にする機会は多かったものの、訪れたことはなく、松崎に関する知識も全くない状態で参加しました。事前学習を通じて、松崎の特徴や良い所を知ることができましたが、実際に松崎を訪れ、様々な場所を巡り、地域の人とお話することで、より松崎に惹かれるようになりました。私が考える松崎の一番の魅力は「人の温かさ」だと思います。町を歩いたり、お店に入ったりすると必ず話しかけてくださり、地域の魅力について説明して下さることが多いということが、印象に残っています。そして、最終発表の後も、地域の方々が親身になってアドバイスをくださいました。このように、松崎町の方々は本当に温かく、地元愛や地域への想いを持っている方が多いということが最大の強みだと感じました。

また、今回のプロジェクトでは、松崎町の魅力に触れると同時に、事業計画をチームで作上げることの難しさも学びました。最終発表を終えて、スモールスタートで物事を考えていくことや、事業を考える上で様々な視点に立って考えることの大切さを学びました。このプロジェクトを通して学んだことを心に止め、成長していきたいです。そして、また松崎町に行きたいです。

杉田 遼奈

横浜市立大学 国際教養学部 国際教養学科 3年

わがまち魅力化プロジェクトに参加し、私が学んだことは、事業提案と人生はトライアンドエラーであるということです。まず、事業提案を行う過程で、事業に実現性を持たせるためには、担い手の明確化、保護者対応といった複雑な課題への対応を考えることが必要であると学びました。つまり、事業提案を行う際は、発見したニーズに事業案をぶつけて終わりではなく、それを事業として成立させるための障壁を取り払う過程が必要です。そこで、経営上不安定な部分の洗い出しや、起こり得る問題を最大限把握し、内容を改善するためにシミュレーションを繰り返すこと、また、プレ・プレゼンのように外部の意見をもらい、欠けている部分を洗い出すことが大切であり、まさにトライアンドエラーを繰り返して行うのが事業提案であると身をもって知りました。また、今回の事業提案では他の2グループの提案と比較して、地域資源が絞れていないこと、オリジナリティの不足など、反省点が多く浮かびました。しかし、これでダメだったと気持ちを終わらせるのではなく、まずはやってみたことが大切だったと信じて、次もまたトライしてみようと思います。わがまち魅力化プロジェクトは、次の挑戦に向けて背中を押してくれるような、貴重なトライの場でした。

舟久保 夏寧

都留文科大学 教養学部 地域社会学科 2年

今回のプロジェクトを通して自分たちの手で事業を立ち上げることの難しさを実感することができました。これまで大学で行ってきた活動では、事業主体や予算などあらかじめ決まっております。ある程度の枠組みの中で提案を行ってきました。しかし今回は、一から自分たちで企画を考え、事業計画書や収支計画表の作成まで行う必要があります、より「自分事」として捉えなければならない点に難しさを感じました。その一方で、ゼロから作り上げるからこそ「実現させたい」という思いを強く持ちながら活動に取り組むことができました。

また、私たちは今回「まち留学」と題して、2週間の松崎町滞在プログラムを提案しました。実際に松崎町を訪れ地域の方々にインタビューをする中で、住民のみなさんの温かさや優しさ、そして松崎町をより良くしようとする姿勢に触れました。その経験を通して、松崎町の人々の魅力そのものが観光資源の一つであることに気づきました。これらの学びによって、プロジェクト内容をより具体的で充実したものにすることができたと思います。

今回の「わがまち魅力化プロジェクト」としての提案に今後携わる機会はありませんが、松崎町の魅力を知る一人の学生として、このプログラムを実現させたいという思いを強く持っています。今後も再び松崎町を訪れ、さらにその魅力を深く知っていきたいと感じました。4日間、本当にありがとうございました。

安島 芽生

慶応義塾大学 理工学部 システムデザイン工学科 3年

「日本のまちについて知りたい」という思いからわがまち魅力化プロジェクトに参加しました。私は大学で建築・まちづくりを専攻しており、将来はまちづくりに携わる仕事につきたいと考えています。

今回のプロジェクトを通して、松崎町の人々のまちへの思いを強く感じました。すれ違ったまちの方は皆、「このまちのことをよろしく」と笑顔で声をかけてくださいました。その言葉の裏には、まちの将来への不安や、私たち若い世代への期待が込められているように感じ、胸が締めつけられました。だからこそ、松崎町の魅力を次の世代につないでいく力になりたいと思いました。

フィールドワークでは、入江長八をはじめとする左官職人の「鰻絵」に出会い、町全体がアートのように感じました。長い歴史を大切に受け継いできた人々の思いに触れ、松崎町の「らしさ」はこうした日常の中に息づいているのだと気づきました。

来年の夏には、今回出会った方とともに松崎町の子どもたちと協働するイベントを開催予定です。世代を越えて人がつながり、地域が自らの力で輝き続ける仕組みをつくりたいです。歴史あるまちをこれからの時代にどう残していくかを、松崎町での学びを通じて、これからも考えていきます。

サポーター（松崎町魅力化プロジェクト 2024 経験者）

山田 詩乃

国際基督教大学 都市教養学部 アーツ・サイエンス学科 4年

この度はオブザーバーとしてわがまち魅力化プロジェクトに関わらせていただき、ありがとうございました。昨年の参加者ということでサポート役をいただきましたが、初めはなにができるのかわからない中で準備を進めました。歳の近い参加者に何ができるか不安もありましたが、プロジェクトが始まると皆さんに優しく受け入れていただき、楽しみながら完遂できました！ありがとうございました。

昨年の自身の提案に悔いが残っていたのですが、今年は「提案の質の向上に貢献できた」と感じる瞬間と出会えました。また、名前は提案スライドには載りませんが、去年以上の達成感を味わい、サポートという関わり方にやりがいを感じる新たな自分にも出会えました。加えて、サポートという形で参加させていただきながらも、参加者といっても遜色ないほど夢中で学ばせていただきました。貴重な学びと自己発見の機会をいただきありがとうございました。

大変お世話になったわがまち魅力化プロジェクトおよび松崎町に、また関わらせていただく機会をいただけましたら幸いです。そのためにも、一層精進し、力になれる人間に成長してまいりたいと存じます。この度は誠にありがとうございました。



上段：左から①安島芽生さん、②浅倉麻尋さん、③杉田遼奈さん、④舟久保夏寧さん、⑤岡谷ひめのさん、
⑥吉川凜乃さん、⑦佐藤翠花さん、⑧早川可奈子さん

下段：左から①堀内参事、②深澤町長、③松田彩花さん、④石黒七海さん、⑤堀川ほのかさん、⑥亀田紗良さん

2. 町の皆さまからの感想

松崎町立松崎中学校 校長

佐藤 文彦 氏

このたびは松崎町が進める「わがまち魅力化プロジェクト 2025」の取組の一環として、総合的な学習の時間を活用して「松崎町の魅力を再発見！大学生と考える地域づくり」と題した交流学习を行い、本校3年生30名と首都圏で生活する大学生の皆さんがともに松崎町の魅力を語り合う貴重な時間をもつことができ大変感謝しています。

西豆地区（松崎町・西伊豆町）は少子化による人口減少が加速しており、児童生徒数の減少によって学校の統廃合は進行（1995年12校→2025年5校）、西豆地区が直面する課題となっています。本校の生徒数も減少の一途（1995年299人→2015年194人→2025年93人）をたどり教育活動にも影響を及ぼし始めています。

こうした動きの中で2008年度より本校を含む西豆地区の3中学（統合により現在は2中学）と松崎高校との連携型中高一貫教育がスタートし「西豆の子は西豆で育てる」を合言葉に、中学と高校及び地域が連携協力しながら、6年間の教育活動を通して西豆地区の発展に貢献する人材育成をめざして「西豆学」に取り組んでいます。これは西豆地区の方々とはふれあいながら、桜葉を使った菓子作りや自然体験、船釣りや地魚を使った寿司づくり、ジオ学習などの体験活動を通して、自分たちの暮らす西豆地区のよさを発見し、郷土に誇りを持つことを目的に行っている学習です。これにより西豆地区のよさは感じつつも多感な時期の中学生にとっては、進学先の少なさや交通の不便さ、商業施設や娯楽施設の少なさなどのマイナス面から都会生活への憧れには強いものがあり、高校卒業後はほとんどの生徒が西豆地区を離れていく状況が続いています。

このようななか、今回、首都圏で生活する大学生とともにグループワークに取り組み「松崎町のよいところ、そのように考えた理由」を話し合うことで中学生と大学生との視点の違いについて共有したり、「松崎町にきたい」と思ってもらえる発信内容についてまとめたりした交流学习は、本校生徒にとって大変刺激を受けるものとなりました。特に感心させられたことは大学生が生徒の思考を促す声かけを積極的に行っていたことです。「どうしてそう考えたの？」「どのような方法があると思う？」との投げかけにより中学生ならではの柔軟な発想からの意見がたくさん出され、普段、松崎町に住んでいるからこそ気づかない観光客を惹きつけてやまない松崎町のよさや魅力など観光客の視点で捉え直すことができたように感じています。

松崎町、西豆地区の自然豊かな環境、人と人との温かな繋がり、そしてゆとりある生活が、多くの観光客を惹きつけ、都会では得られない様々な魅力が松崎町、西豆地区にあることを再発見することができました。これを今後の西豆地区の可能性を探るためのひとつのきっかけとしていきたいと思っています。

今回来校いただいた大学生の皆さんをはじめ運営スタッフの皆さんには心より感謝申し上げます。



松崎町立松崎中学校 教諭

鈴木 直樹 氏

今回の交流会の目的説明と各グループでの自己紹介の後、松崎町の魅力に気づかせるために松崎町の良いところとその理由を話し合わせました。生徒たちは自分たちの町の良さになかなか気づくことができませんでしたが、大学生の発言を聞いて松崎町にはたくさんの魅力があることに気づくことができました。その後、外国人観光客、家族連れ、都会の社会人に松崎町に来たいと思ってもらえるにはどのように発信すればよいかグループごとにまとめていく際に、大学生の支援を受けながら生徒たちも松崎の魅力について堂々と発言することができていました。事後アンケートには、「以前は松崎町には魅力がないと思っていたが、都会にはない自然や文化があることに気づいた。」「他の町から来た人は松崎の自然が豊かなことにびっくりすることに気がついた。」「自分が考えているよりも、もっとよい自然や環境があることに気づいた。」と書かれていました。地域の魅力を再確認する良い機会となりました。

民泊施設「Ecotone」運営事業主

森 孝之 氏

昨年につき、「わがまち魅力化プロジェクト」において、熱い思いを持った学生さんと関わったことを大変嬉しく思います。現在若い世代の中で流行していることをうまく取り入れたアイデア等、私自身も勉強になることが多くありました。私たちは「自然」をテーマとして町の魅力醸成をしていきたいと考えていますが、また学生さんをはじめ、新たな風を入れてくださる様々なジャンルの方とも連携しながら、一緒に魅力を考えていきたいと感じました。またどうぞよろしく願いいたします。

県指定有形文化財 旧依田邸 案内人

渡辺 攻 氏

“わがまち松崎”に3泊4日、松崎の町をどの様に感じましたか？少子高齢化は我が国が抱える問題ではありますが、そんな中でも、自然が残り、温暖な気候に恵まれたコンパクトな“まち”文化が高く、歴史が残るそんな“まち”も、かつては多くの観光客が訪れた松崎でした。魅力が埋もれたこの“わがまち”に学生の皆さんのご提案をいただく良い機会に感謝しています。お立ち寄りいただいた“旧依田邸”は築300年を経た県指定有形文化財、その保存の一環として日頃、皆さまをご案内しています。学生さんからは質問もいただき、関心の高さを感じてタイムオーバー。他では感じられない、ゆったりとした“わがまちの魅力化”へのご提案、有難うございました。

雲見温泉 雲見園 女将

高橋 亜希子 氏

良い刺激をもらいました。インタビューは予定の30分で終わるつもりですが、1時間半になるくらい、全く知らない流行りを取り入れた旅の仕方に興味が湧きました。目の付け所が面白く、またこちらからの厳しい意見に対しても一生懸命に説明をする姿は応援したくもなりました。今後は宿でもプランとして考えています。それは同時に宿だけではなく、松崎町の魅力を多くの人に広く知ってもらえることにも繋がります。この魅力化プロジェクトそのものだと思います。宿屋は一軒だけでは成り立ちません。地域・町のおかげもあり、共存共栄していくものと思います。町の活性化にも繋がるプレゼンは素晴らしかったです。

地域おこし協力隊

坂本 武尊 氏

～プロジェクトを振り返って

地に足の着いた発表内容であったと思います。

～参加学生のプレゼン内容について

個人的な判断基準として実現は可能か、そのうえで棚田と結びつけることは可能かどうかという点を(でのみ)重要視していましたので、各グループがその要件を十分に満たしていたと思います。

～次回の実施開催について

新規参加学生による新プロジェクトは、当然、町としては歓迎すべきことだとは思いますが、一方で新規学生による既存プロジェクトの引継ぎ、新規学生による既存プロジェクトのアップデート、なども同時に認めるのはいかがでしょうか。

毎年0からの、真っ新たな状態からのスタートで、というような革新ばかりで上積みや成熟が期待できない点は、受け入れる側も送り出す側も今後考慮しなければならない点だと思えます。

伊豆まつぎき田舎暮らしサポート隊 (松崎町移住定住促進協議会)

神 健一 氏

この度は、このような機会に参加させていただきありがとうございました。学生さんから新鮮で今までに気づけなかった様々な視点の企画提案をいただき、わがまちの魅力はまだまだポテンシャルをもっていて、進化ができると実感できました。あとはどうやって形にできるかだと思います。一つひとつは小さいかもしれませんが、企画を形にできるよう、学生さんたちと一緒に頑張っていきたいと思えます。

3. 地域金融機関からの感想

静岡銀行松崎支店 支店長

杉山 幸永 氏

昨年に続き 2 回目の審査員として参加させて頂きました。昨年の事業提案は、①民泊を利用した農業体験、②松崎町を紹介するパンフレットの作成、③松崎町の魅力について SNS を使って拡散する宣伝ビジネスの 3 案が示されました。何れも松崎町の良さを町外の方に知ってもらうための事業提案であったかと思えます。

今年の提案は、①棚田を使った「ピクニック」、②松崎町での「ぬい旅」、③松崎町での「体験留学」の 3 案でした。昨年の提案とは全く違う角度からの提案であったため、プレゼンを聞くまで私たちの 50 年代の人間は「どういうこと??」といった疑問から始まりました。ところが、プレゼンを聞いている内に「なるほど!」と疑問が晴れていくのを感じました。新事業を考える場合、松崎町にある名産品や名所・旧跡を使った事業を考えがちですが、今回の提案は、まずは自分たちの趣味を楽しむことや体験することを優先し、その趣味や体験を楽しむ場所が松崎町であるという、逆転の発想でした。

ならば「松崎町でなくても良いのでは?」と考える方もいるかもしれませんが、趣味に没頭できる市町がまだ全国的にないとするれば、先駆者メリットを充分受けられる可能性がある事業であると素直に感じる事が出来ました。今年の学生さんたちは松崎町に来る前に 3 ヶ月かけて事前研修を受けてきたとのこと、その成果もあって松崎町の歴史や文化、課題等をしっかり理解されており、プレゼンにも説得力がありました。

今回の提案は導入のハードルが低いことが特徴かと思えます。主役はあくまで旅行者や小中学生であり、町や町民はサポート役に徹する。コストもそれほど掛けないで始められる内容

であったことは実現性を高める上で有益な提案であったかと思います。

銀行員目線から見れば、事業計画の精緻さ採算性の根拠等、詰めるべき事項も多々ありますが、まずは学生さんが学生さん目線で提案してくれた今回の事業を大人の論理で批判するのではなく、まずは出来るところからやってみようという「トライ&エラー」の気持ちで実行に移して欲しいと強く願います。今回の提案をプロジェクトに参加していない町民や事業者にもオープンにし、主体的に携わって頂ける方を募集して欲しいと思います。様々な方の前向きな意見を取り入れることで、成功の確率は高まると考えます。本プロジェクトを成功させるためにも町の積極的なサポートを期待します。我々地域金融機関も一緒になって盛り上げていきたいと思っています。是非、皆の力を結集し松崎町発の新事業として成功させましょう！

三島信用金庫 松崎支店 支店長 市川 拓也 氏

「わがまち魅力化プロジェクト」に参加頂いた学生の皆さま、スタッフの皆さま、松崎町にお越し頂き誠にありがとうございました。今回参加された学生の皆さん、各チームの取り組みについて、地域の魅力を掘り起こし、アイデアを出し、私たち自身、地元の方も含めて改めて松崎町の良さを再認識することができました。わがまち魅力化プロジェクトに参加し「松崎の魅力を発見し、未来に向けて継続、発展させたい」という思いが強く感じられ、町の歴史や文化、自然環境などを事前に調べ、当地に来て地元の方々からの情報収集も行われ新しい価値を見出そうとする姿勢が非常に頼もしく感じられました。それぞれ異なる大学の皆さんが協力し合いながらそれぞれの役割を果たし、一つのものを作り上げる姿はとても素晴らしく感じられました。4日間という短い間で調査し、企画をまとめ発表に至るまでの過程には多く

の困難があったと思いますが、お互いを尊重しながらアイデアを形にしていく力は今後、社会に出てからも必ず役に立つものだと思います。地域づくりの現場では「正解は1つではない」分野であり、試行錯誤しながらも前に進む経験こそが大きな財産になると思います。今回のプレゼンで印象的だったのは参加された女性の学生の皆さんが示してくれた視点や感性の豊かさ、表現の仕方にもよく表れていたところです。見る人・聞く人が自然と共感できるような工夫があり、相手にどう伝わるかを考える繊細な思いやりであり、地域の魅力を発信していく上で大きな強みになると感じました。YouTubeやInstagramといったSNSを効果的に使い、町の魅力を直感的に伝え、行ってみたいと思わせる力を持っていたと感じました。単に宣伝をするのではなく共感を呼ぶ発信になっており、「この町でこう過ごしたら楽しいだろう」と自然に想像させる力を持っていました。今回プレゼンして頂いた内容については今後の町づくりに結び付けて頂ければ幸いに思います。プレゼンの経過、課題、問題点を町全体でどのように共有するか。行政だけでなく商工会、観光協会、金融機関等がどのように連携するかを考え、このプロジェクトが有効に活かされることを願います。



4. コーディネーターから

一般財団法人日本総合研究所 副主任研究員
田中 佑治



(1) 気づきと共感から 協働へ

「わがまち魅力化プロジェクト」では、都市部の大学生が少子高齢化や過疎化の問題を抱える地方のまちに滞在し、フィールドワークを行いながら地域住民や地元事業者と関わることで、地域外の若者目線から地域の魅力を発見し、その資源を生かした事業化プランを考え、発信する。そして、地域内外のステークホルダーによるその地域の魅力への“気づき”と“共感”を引き出し、協働関係を作ることで地域活性化につなげることを目的とするプロジェクトです。

魅力化プロジェクトの肝となるのは、やはり地域外からやってきた大学生によるフィールドワークと、それにより生まれた事業プランのお披露目の場であるプレゼン大会です。3日間という短い期間での集中的なフィールドワークと最終日の事業提案プレゼンを通じて見えてきたことは、短い時間の中でも“松崎町”という地域の魅力を最大限に見出し、より良い提案を生み出そうとする学生たちの真摯な姿勢と、そこから生まれた事業プランに深く頷く地域内外の関係者による地域の魅力への気づきとアイデアへの共感でした。まさに魅力化プロジェクトの目指すところである協働による地域づくりの入り口に立ったのです。

(2) 現場力が鍵となる地域の豊かさと幸福

私が所属する日本総合研究所では、日本の幸福を追求するべく、県民幸福度研究プロジェクトを推進しており、2012年から隔年で『全47

都道府県幸福度ランキング』という書籍を継続して発刊してきました。「国の創生は地域（地方）の創生から」をキーコンセプトとして、地域に生きる人々の幸福を実現するための「日本総研型アプローチ」を深化させてきました。10年以上に及ぶ研究から、地域の豊かさを司る重要な要素は、魅力の源となる“生業（モノ・コトづくり）”と、それを維持・継承していく“担い手（人づくり）”だと認識しています。

昨今の世界のGDPにおける日本の占める割合の低下などに表されるように、日本の国際的な立ち位置が揺らいでいる現在、日本という国を立て直し、豊かで幸福な国にしていくためには地域（地方）の底力を高め、結集させていくことが欠かせません。そのために、地域の物質的な豊かさや魅力を生み出していく生業と、それをこの地域で維持・継承していきたいと願う担い手が多く存在することが重要です。つまり、日本が豊かで幸福な国になっていくための鍵となるのは、生業と担い手による、地域の豊かさを生み出す“現場力”を高めていくことであり、「わがまち魅力化プロジェクト」は、まさに我々が考える日本の幸福追求を体現する実践的プロジェクトなのです。

今回、フィールドとしてご協力いただいた松崎町は、「困難な課題を分かち合い、お互いに助け合うまち」（コンパッションタウン松崎）を目指して、地域づくりを進めています。魅力にあふれ、豊かで幸福な地域となっていくために必要な現場力、それを下支えするのは、コンパッションに突き動かされてお互いに助け合うコミュニティの存在です。このような地域づくりがあってこそ、「わがまち魅力化プロジェクト」との相乗効果が発揮されていき、自立的・持続的な地域社会が形成されていくことを、大学生とともにまちを歩き、地域の皆様からお話を聞く中で実感することができました。

ご協力いただいた地域の皆様に深く感謝申し上げます。

一般財団法人日本総合研究所 理事兼主席研究員
一般財団法人社会開発研究センター 理事
一般社団法人 COLLEGA (コッレーガ) 代表理事
内田 誠一



(1) プロジェクトの軌跡

「わがまち魅力化プロジェクト」は、故 安田泰敏棋士・九段（元 東京富士大学客員教授）の依頼を受けた（元）東京富士大学・黒田秀雄教授（現・日本総合研究所特任研究員、COLLEGA 理事）が企画し、当時担当していた東京富士大学企業ビジネス同好会の学生を連れて、地域おこし協力隊や地元の住民、事業者などの関係者と連携しながら活動をスタートしました。2 年目から私たちも、その連携の枠組みに参画し、大学と地域を結ぶコーディネーターとして、企画立案や調整等の役割を担ってきました。

プロジェクトは、これまでに鳥取県日野町（2016～18 年）、山梨県市川三郷町（2019～22 年）、そして 2024 年からは松崎町をフィールドとして実践活動を行ってきました。日野町では地元の方々の協力もあって、大学生から提案された事業プラン（3 年間で 13 案件）のうち 5 案件が実現に至りました。

少子高齢化や過疎化、それに伴い生じている生活課題・社会課題を抱える地域は全国各地にあります。私たちは、一つのフィールドで 3 年間取り組むことを基本方針としています。

(2) 自立的・持続的な地域づくりに向けて

本プロジェクトの参加学生にとって、実際に地方の生活環境に触れる経験、普段話すことのない方々との会話や交流は、自身の成長の糧となることでしょう。もっと言えば、「人間力」の向上にもつながると考えています。人間力は、社会の中で生きていくために必要なことで、知識や想像力などの知的能力、意欲や忍耐力など

の自己制御、そしてコミュニケーションスキルやリーダーシップなどの社会・対人関係力です。いつもとは異なる他大学の学生とチームを組んで一つの目標に向かっていくことで、この人間力も身に付くと考えています。

町の皆さまにとっては、プロジェクトを通じて、あらためて町のことを見つめ直す一つの「きっかけ」になったのではないのでしょうか。

なお、これまでのプロジェクトを通じて、70 人超の学生が参加し、各地域にとって関係人口の創出にもつながりました。

自立的かつ持続的な地域づくりに向けてポイントとなるのは、多様な人の交流を通じて、地域の「魅力」を核にして、地域社会の将来像をデザインし、実践していくことだと考えています。それには、地域資源の価値を最大限活用して、その地域ならではのモノ・コトをつくっていくこと（生業づくり）、それと地域を想う人を育てること、そういう人同士をつなげていくこと（人づくり）が大事になります。今回は地元の松崎中学の生徒と大学生との交流もあり、生徒たちの地元愛の涵養に貢献できたのであれば望外の喜びです。

よく、地域活性化には「ヨソ者」や「若者」の視点が大事だといわれます。本プロジェクトでは、都市部の大学生というヨソ者・若者と地域をつないでいます。ただ、実際に地域を変えていくのは、そこで暮らす住民や事業者です。なので、わがまち魅力化プロジェクトは、一つの地域に 3 年間という期限を設けています。

「住民自らが地域のことを考え、行動すること」、これが地域創生の前提です。魅力化プロジェクトは、その「きっかけ」でもあります。

今後、地方を知らない東京圏出身者の若者はますます増えていきます。参加学生にとって、松崎町が思い入れのある、第二の故郷として心に刻まれたことと思います。

最後に、地域の皆さまのご支援・ご協力によって実施できたことに感謝申し上げます。

IV. 松崎町魅力化プロジェクト 2025 成果報告会

成果報告会の概要

《開催概要》

開催日時：2026（令和8）年1月15日（木）18：00～19：30

開催方法：オンライン

開催目的：単なる振り返りの場ではなく、①プロジェクトの価値を可視化・共有し、広く発信すること、②学生の成長や地域への影響を示し、関係者が“関わる意義”を感じられる場にする、③次年度以降の協力関係を拡大するため自治体・地域事業者・企業・大学を巻き込むこと

《プログラム》

開会あいさつ

成果報告（プロジェクトのスケジュール、数字とエピソードで見る成果、提案内容報告）

その後の学生の松崎町との関わり（事例紹介）

今後の展望

質疑応答

閉会あいさつ

《参加者》

参加学生、大学教員、行政関係者（町長、職員）、観光協会、地元事業者、地域おこし協力隊、地域金融機関など約20名

その後の学生と町との関わり

《Aチーム》

●学生提案に対する評価（フィールドワーク時）

- ・事業提案時、棚田を単なる農地ではなく、体験型の観光資源として再定義している点が非常に面白いという評価だった。
- ・また、若い世代から入り徐々にターゲットを広げていくというような視点や、棚田の新しい存在価値を町に生み出す可能性といった点が評価されていた。
- ・一方で、誰が事業を引っ張っていくのか、どのように持続させていくのか、今後の検討課題として挙げられていた。

●その後の町との関わり

- ・プロジェクト終了後も方針は変わっておらず、棚田でアウトドアレンタル事業を軸とした取組を進めようと考えている。実際に松崎町の役場や観光協会の方に話を伺ったり、棚田で年一度に行われる収穫祭にはメンバーのうち2人が参加し屋台を出店した。現在は、春の事業開始を目指して事業計画を見直している段階である。

- ・あわせて、事業提案の中でも触れたマップの作成にも取り組みたいと考えている。
- ・今後も、メンバーそれぞれの生活状態に合わせて、その時期、その時期に動ける人が交代しながら関わっていきたいと考えている。

●町の関係者から（地域おこし協力隊・坂本氏）

- ・9月のプレゼンテーションの後に、10月の棚田の収穫祭に来てもらえないかと相談した。本来Aチームが想定している活動内容ではなかった点はあるが、現場の作業員やオーナーの皆さんにも好評をいただいた。
- ・現実問題として、学業との両立や現場の者との折り合い、あるいは事業費といったハードルはどうなのか。ぜひ今後も継続して石部の棚田と関わってもらえたらと考えている。今回のプロジェクトの趣旨に沿うような「スモールスタート」で、現実寄り添った素晴らしい提案だと確信している。



静岡新聞 DIGITAL 2025.10.15

《B チーム》

●学生提案に対する評価（フィールドワーク時）

- ・ぬい活という着眼点そのものが新しく、ハードルの低い観光の入り口になるのではないか、といったフィードバックが多く集まっていた。
- ・特に、Z世代ならではの感性、SNSの親和性の高さが非常に評価されていた。

●その後の町との関わり

- ・松崎町には「蔵ら」というところでバービー人形の着物を作っている。実際に自分で縫い服を作れると面白いねといった話をしていたので、ぜひ協力していきたい。

●町の関係者から（松崎町観光協会・依田氏）

- ・一度お話ししたときから、とてもぬい活に対して興味があり、「蔵ら」と松崎町だからこそできるのではないかと考えている。これからの観光では、若い世代へのアプローチするのは必要なことで、学生の皆さんのお知恵を借りながら、ぜひとも協力していきたい。

《C チーム》

●学生提案に対する評価（フィールドワーク時）

- ・子どもたちの成長と関係人口の創出を同時に目指している点が高く評価されていた。特に小中学生を対象としたプログラム、町民や高齢者の方々が主体となって関わる事業設計になっているところが評価されていた。

●その後の町との関わり

- ・9月に松崎町を訪問した後、交流会で出会った学識者の方に中高生によるSDGs実践発表会に招待いただき、そのプログラムの一つのワークショップで司会を務めた。また、町の事業者とも知り合い、自身が個別で取り組んでいる教育系の活動と絡めて、夏休み頃に何か取り組めないか検討している。3月末のお花見シーズンにも町を訪れる予定としている。

●町の関係者から（松崎町移住定住促進協議会・神氏）

- ・自身は移住定住だけでなく、関係人口を創出する取組の中で、Cチームの提案内容は響くところがあった。その後、学生とは何回かやり取りをして、来年度何か一つでも形にできるよう動き始めた。何か小中学生向けの教育系の企画ができれば良いと思っている。

深澤町長の総括

- ・プロジェクトとのつながりのきっかけづくりの責任が自分にもある中で、3チームからの提案を時間軸でどの程度継続して発展させていくのか、調整をしながら皆さんでやっていく必要がある。
- ・学生が松崎町に来て感じたものを、もっと深いところでフィードバックいただければ、二地域居住や関係人口など輪郭が見えてくると思っている。これから学生が就職して働くようになってからも、松崎町での経験がプラスになるとありがたいと思う。サブビジネスとしてソーシャルビジネス的に地域活性化の取組を継続してもらえるとありがたい。
- ・松崎町に東京からボーイスカウトが訪問する予定である。子どもたちも混ぜて取り組むこともあると考えており、この松崎町というキーワードの中で地元の人でも年代も住んでいるところも全てごちゃ混ぜで何かできないかと考えている。
- ・3パターンの事業提案にはヒントもあって、とても真剣に松崎町のことを考えていた。地元では気づかないことも多く、松崎町として前面に打ち出していきたいのは歴史、文化、教育的な側面であり、人を育てるというキーワードがある。これから先、若い人たちは本当に不安定で不確実な世の中に出て生きていくこととなり、我々の経験したことがない世の中が来るだろう。それに対して、主体性を持って考えられるような体験を提供できればよいと考えている。そういった意味で、とても良いプロジェクトだと思うし、日本のあり方を考える機会にもなっているかなと思っている。

主催者による総括

- ・今年の参加学生は非常にモチベーションが高く、真剣に松崎町に向き合ってくれた。また、今回は、松崎中学校と交流することもできた。このプロジェクトの一つの方向性である地元愛の醸成に、少しでも貢献できたのであれば非常にうれしいと思っている。
- ・学生が提案してくれた内容はどれもユニークで、その後も継続的に松崎町と関わっているとのこと、とても心強いと思った。
- ・今回の参加学生も、次回は運営者側に加わってもらい、サポーターとしてこのプロジェクトを見守ってもらえると助かる。
- ・今後の課題としては、継続性というキーワードも話の中に出てきたが、学生が提案してくれたことを、きちんと地元で受け取って、一緒に事業化に向けて動いてくれる人、そういった地域人材を見つけることが大事であると思っている。

- ・このプロジェクト自体を地域で我々と一緒に回していく、そういったサポーターを増やしていくと良い。我々のノウハウは、包み隠さずオープンにするので、そういうことに加わってみたいという人材をご紹介いただきたい。
- ・今後、松崎町ともよく話し合いながら準備を進めていきたい。

派遣元の大学教員からのコメント

●三輪律江教授（横浜市立大学 国際教養学部 都市学系）

この度は、学生への学びの機会をいただき、ありがとうございました。今年度初めての参加でしたが、当日のプレゼンやその後の質疑応答のやりとりを通して、多彩な住民の方や行政の方の、日々の営み、地域への思いに触れ、それを自分なりに咀嚼し、紆余曲折しながらチームのメンバーと共に提案に漕ぎつけた様子を垣間見ることができました。この一連の取組を通して、今後の人生にも影響する貴重な経験となっていること、また参加した学生がこの実習前より一回り成長していることを実感しました。

まちづくりには「ヨソモノ・ワカモノ・バカモノ」が必要だとよく言われますが、今回ヨソモノでワカモノでも、まだ未熟である学生たちは、松崎町の魅力化についてジブンゴトとして捉えていたからこそ企画・提案ができたのだらうと思います。そしてそれは、地元の皆さまが学生たちと本気で向き合っていたからに相違ありません。さらに学生たちの拙い提案を地元の皆さまが共にジブンタチゴトに昇華しようとしていくスパイラルの様な連鎖が生まれていくことも、このプロジェクトの重要な側面なのだと思います。

改めて、学生たちに本気で向き合っていたいただいた皆さまに、深く御礼申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

●鈴木健大教授（都留文科大学 教養学部 地域社会学科）

この度の準備や運営、夏季のフィールドワーク終了後におかれましても、皆さまのご尽力に感謝申し上げます。

成果報告会では、地域の皆さまが活発に意見交換をされていました。夏休み後も学生たちが町を訪ねていたり、地域の皆さまと一緒に考えてくださっていたりと、大変感心して話を伺っていました。

町の皆さまの期待も大きく、大変熱心で、一部の学生は実際に町で行動に移したいと考えていることがわかりました。ですので、このプロジェクトをどこまで実施し、誰がどう関わっていくのか、整理が必要だと感じました。

もちろん事業化されるのは理想ですが、学生が訪ねるにしても、時間や経費といった物理的な課題があり、直接的な関わりを持ち続けるのが難しい学生もいるかと推察します。来年度以降、プロジェクトに新たに参加する学生にとっても、どこまで関わるのか、見据えるのか、その点でも整理が必要かと思いました。

いずれにしても、このプロジェクトが松崎町や学生たちに前向きなインパクトを持たせたことは大変大きな成果だと思います。私も微力ながら応援できればと存じます。



松崎町魅力化プロジェクト 2025 実施報告書

2026 年（令和 8 年）2 月 20 日発行

〔編集・発行〕

一般財団法人日本総合研究所

一般財団法人社会開発研究センター

一般社団法人 COLLEGA（コッレーガ）

